

千の風と魂のこと

——エミリ・ブロンテの文学と宇宙的理念——

清水 伊津代

はじめに

—昨年のごことになるが、わたしたちブロンテ研究者にとってはちょっとうれしい、エミリ・ブロンテ (Emily Brontë, 1818-48) 現象のようなものがあった。一つは、エミリの詩 146 番¹「老克己主義者」(“The Old Stoic”) が、イタリア賞とギャラクシー賞を受賞したNHKドラマ「ハゲタカ」のエンディング曲として使われ、話題になったこと。もう一つは、作者不詳の、まるでエミリの詩かと思わせるような、「千の風になって」が流行り、人々を魅了したこと。「老克己主義者」は、「まことに、わたしの束の間の生が終わりに近づくとき／わたしが求めるものはただ——／生と死を通して、勇気をもって貫く／何ものにも縛られない魂だけ！」(No. 146, st. 3) と、生と死をこえて真に自由である魂の不滅性を表現し、エミリの宇宙観の根幹を示しているものである。また「千の風になって」も、「わたしは千の風になって大空を吹き渡っています／……／わたしは死んでなんかいません」と、生と死の宇宙的循環の中に解放される不滅の魂を表わしたもので、非常にエミリの的である。本稿では、この「千の風になって」を通して見えてくる宇宙観や存在論から、エミリ・ブロンテの文学に明らかな宇宙的理念の意味を考察することを狙いとしている。

1 「千の風になって」とエミリ・ブロンテの文学における類似表現について

周知のように、「千の風になって」は、英語詩 “Do not stand at my grave and weep” から翻訳されたものである。以下で述べる経緯があるよ

うだが、作者不詳と言われているこの詩にエミリ・ブロンテの表現がどれほど近いのか、あるいは近くないのか。エミリのすべての詩と唯一の小説『嵐が丘』と比較すると、詩では 148 番、149 番、152 番に、『嵐が丘』では第 33 章のヒースクリフ (Heathcliff) が宇宙的理念について語るところに、類似した表現を見ることができるようである。

しかし、どのように類似しているかを説明する前に、まず「千の風になって」の元の英語詩から整理しておきたい。この詩の起源については諸説があるようだが、もっとも有力視されているのは、メアリ・フライ (Mary Frye) というアメリカ人女性がドイツ系ユダヤ人の友人の母親の死を慰めるために、1932 年に書いたという説である。その他にも、英語圏作家の作品だという説、19 世紀末にアメリカに移住したイギリス人男性の作とする説、メアリアン・ラインハート (Marian Reinhardt) というアメリカ人女性による説、米国先住民族の伝承とする説、アボリジニ、アイヌ、ケルト人説などなど。結局は、作者不詳ということに落ち着くようである。

しかも、アメリカ人コラムニストのアビゲイル・ヴァン・ビュレン (Abigail Van Buren) は、コラム「ディア・アビィ」(“Dear Abby”) でこれらの諸説を紹介したが、同時にこの詩の表現についても、微妙に違う幾つものヴァージョンがあることを明らかにした。主なものを挙げると、以下のようである。

(A) メアリ・フライによるオリジナル・ヴァージョンと言われているもの

Do not stand at my grave and weep,

I am not there, I do not sleep.

I am in a thousand winds that blow,

I am the softly falling snow.

I am the gentle showers of rain,

I am the fields of ripening grain.

I am in the morning hush,
I am in the graceful rush
Of beautiful birds in circling flight,
I am the starshine of the night.
I am in the flowers that bloom,
I am in a quiet room.
I am in the birds that sing,
I am in each lovely thing.
Do not stand at my grave and cry,
I am no there. I do not die.

(B) メアリ・フライの死亡記事で、『タイムズ』に掲載されたもの

Do not stand at my grave and weep
I am not there; I do not sleep.
I am a thousand winds that blow,
I am the diamond glints on snow,
I am the sun on ripened grain,
I am the gentle autumn rain,
When you awaken in the morning's hush
I am the swift uplifting rush
Of quiet birds in circling flight.
I am the soft starlight at night.
Do not stand at my grave and cry,
I am not there; I did not die.

(C) 新井満が「千の風になって」の原詩として翻訳に採用したもの

Do not stand at my grave and weep;

I am not there, I do not sleep.

I am a thousand winds that blow.

I am the diamond glints on snow.

I am the sunlight on ripened grain.

I am the gentle autumn's rain.

When you awaken in the morning's hush,

I am the swift uplifting rush

Of quiet birds in circled flight.

I am the soft stars that shine at night.

Do not stand at my grave and cry;

I am not there, I did not die.

それぞれのヴァージョンで句読点のつけ方や言葉使いに少々の違いがあるが、注目すべきは、(A)のヴァージョンの最終行 'I do not die.' と、(B)(C)のヴァージョンの最終行 'I did not die.' の違いであろう。これらには、「人の生と死の捉え方」を表わす点で大きな差があるからである。

因みに、新井満は著書『千の風になって』の中で、次のように解釈して、'I did no die.' のヴァージョンの方を採用していることを明らかにしている。彼は言う、『『人間が死ぬ』、『死ぬとまず風になる』、『次に様々なものに生まれ変わる』とこの詩の作者は考えている』と。² それゆえ彼は、この詩のメッセージとして、「千の風になるとは、大地や地球や宇宙と一体化すること」、「人間は“いのちの大きな循環”の中にくみこまれること」、すなわち「いのちは永遠に不滅」であること」、を引き出している。つまり新井満は、「私はたしかに死にました。けれど人間以外のいのちに生まれ変わって、今

もししっかりと生きているんです。だから心配しないでください。私のお墓の前でそんなに嘆き悲しまないでください」と解釈したと言って、³〈いったん死んだけれど、実は死んだのではない〉のヴァージョンの方を採択して翻訳しているのである。それで彼はこの詩を、「死と再生の詩」と意味づけるのである。

この解釈と比べると、‘I do not die.’のヴァージョンの方には、〈わたしは死んでなんかない。わたしという人間は風であり、雪であり、光であり、雨であり、鳥や星でもあるのだから〉という、人間を不死の存在とするメッセージが明らかである。つまり、一時的にせよ生命の終結というものを否定し、存在の継続性・不滅性をより明確にして、自然の万物と融合して存在する〈いのち〉の在りようを強調するのである。

結局、「千の風になって」の原詩で重点的に問題とすべきは、〈人間はいったん死んでから自然の中に再生すると考えるのか〉、あるいは〈人間は森羅万象であるところの継続する永遠のいのちを生きると考えるのか〉、ということであろうと思う。

では、エミリ・ブロンテの場合はどうであろうか。ひとまず、この二点から見てみる。148番の詩では、最後の二つの連は次のようになっていて、いのちの継続性が明らかに提示されている。

Thus truly when that breast is cold
Thy prisoned soul shall rise,
The dungeon mingle with the mould—
The captive with the skies.

Nature's deep being, thine shall hold,
Her spirit all thy spirit fold,
Her breath absorb thy sighs,

Mortal! though soon life's tale is told,

Who once lives, never dies!

(No. 148, sts. 6, 7)

このようにしてまさしくその胸が冷たくなるとき

おまえの囚われの魂はよみがえり

その牢獄である肉体は土くれと――

囚われ人である人間は空と 溶け合うだろう。

自然の深い存在を おまえの存在は掴むだろう

自然の魂を おまえの魂が抱きしめるだろう

自然の息吹がおまえの吐息を吸い取るだろう

人間よ！ まもなく生の終わりが告げられようとも

ひとたび生きたおまえは決して死ぬことはないのだ！ (148 番 第 6・7 連)

第 6 連では、人間は死ぬとき、その魂を解放して大地や空と融合すると言っている。そして第 7 連では、その魂の息吹が自然の息吹と一つになるのだから、いったん生きた人間は死ぬことはなく、宇宙的循環の中で不滅の存在になるのだと表わしている。つまりこの詩は、「千の風になって」に照らしてみれば、「I do not die.’ のヴァージョンの〈いのちの継続性・不滅性〉の意味を強めていると言えるのである。

次に 149 番の詩であるが、最初の 4 行と最後の 6 行は、以下のように、母なる大地に語りかけて死後の永遠不滅のいのちを夢想するものである。

I see around me tombstones grey

Stretching their shadows far away.

Beneath the turf my footsteps tread

Lie low and lone the silent dead;

.....

We would not leave our native home

For *any* world beyond the Tomb.

No—rather on thy kindly breast

Let us be laid in lasting rest;

Or waken but to share with thee

A mutual immortality.

(No. 149)

わたしの周りには灰色の墓石が
遠くまで影を延ばしているのが見える。
わたしの足が踏んでいる芝上の下には
物言わぬ死者がさびしく横たわっている。

.....

墓の向こうにどのような世界があろうとも

わたしたちはこの故郷の家から離れはしない。

いや——むしろあなたの優しいその胸で

永遠の安らぎに浸らせてほしい。

それとも 生きてあなたと

互いの不滅を分かち合いたいのだ。

(149 番)

この詩では、死は全面否定されていない。詩の語り手は、死んで大地と一体化する不滅の存在となるか、あるいは大地の上でその息吹を共有して永遠のいのちを得ることを、願っている。「千の風になって」のヴァージョンで言えば、'I did not die.'の意味合いが強いと言えるであろう。

次の 152 番では、さらに即物的表現がなされているところに、「千の風になって」と類似したイメージを結ぶことができそうである。

I do not weep, I would not weep;
Our Mother needs not tears;
Dry thine eyes too, 'tis vain to keep
This causeless grief for years.

What though her brow be changed and cold,
Her sweet eyes closed for ever?
What though the stone—the darksome mould
Our mortal bodies sever?

Remember still she is not dead,
She sees us, Gerald, now,
Laid where her angel spirit fled
'Mid heath and frozen snow.

(No. 152, sts. 1, 2, 4)

僕は泣いてなんかいない 泣いたりするもんか
僕たちの母さまには 涙なんていらんんだ。
君も目を拭くといい いつまでもこの理由なき悲しみを
抱えていても無駄なのだから。

母さまの顔が変わり冷たくなっても
あの優しい目が永久に閉じられても 何のことがあろうか？
お墓が—— 黒々とした墓土が 僕たちのいのちある肉体を
隔てていても 何のことがあろうか？

母さまは今も死んではいないことを思い起こしてごらん
ジェラルド 今でも母さまは僕たちを見ていらっしゃるんだよ

ヒースの中 凍てついた雪の中で

天使のような魂が飛び立ったところに横たわっていらして。

(152番 第1・2・4連)

‘I do no weep’ という言葉に始まり、墓の中の死者の不死を表現しているところは、いかにも「千の風になって」ふうのイメージと繋がる。さらに、「千の風になって」の原詩のディスコースは、死んだ者から生きている者に語りかけたものであるから、この詩で生者から死者に語りかけているところのスタイルは同じではないが、お墓の中で眠る死者の死を前提とした上で、死者の肉体から解放された魂の永遠存在を示しているところが、〈死んだけれど、実は死んではない〉という ‘I did not die.’ のヴァージョンと類似している。

そして、『嵐が丘』の次の表現を見ると、さらに「千の風になって」に近似したものを、私たちは確信できるのである。キャサリン (Catherine) の死後、彼女の魂との合一を求めるヒースクリフが、ネリー (Nelly) に言う言葉である。

‘... for what is not connected with her to me? and what does not recall her? I cannot look down to this floor, but her features are shaped on the flags! In every cloud, in every tree—filling the air at night, and caught by glimpses in every object, by day I am surrounded with her image! The most ordinary faces of men, and women—my own features mock me with a resemblance. The entire world is a dreadful collection of memoranda that she did exist, and that I have lost her!

(*Wuthering Heights*, Ch. 33)⁴

「……俺にとって、彼女に繋がらないものが何か一つでもあるだろうか？」

彼女を思い出させないものが何かあるか？ この床を見下ろせば必ず、彼女の顔が床石の上に現れてくる！ どの雲にも、どの樹にも——夜には大気をいっぱい満たして、あらゆるものの中に彼女の姿が見えている、俺は一日中彼女の姿に取り巻かれて生きているんだ！ 男や女の平凡な顔も、また俺自身の顔までもが、どこか彼女に似ていて、俺をあざ笑っている。全世界は今や、彼女が生きていたことを、そして俺が彼女を失ってしまったことを、思い出させるおぞましい集合物になってしまっている！」

（『嵐が丘』第 33 章）

この言葉も生きている者の視点で語られてはいるが、ここでは、死んだ者が雲になり、樹々になり、空になり、大気の息吹になり、宇宙のいのちある万物と一体となって、永遠のいのちを得ているさまが表わされている。まさしくここには、「千の風になって」の類似表現を見ることができるのである。しかし、エミリはヒースクリフを通してそのようにキャサリンの不滅のいのちを表象させる一方で、最後のセンテンスでは彼女の死の現前性を嘆かせてもいるので、「千の風になって」で言うと、ここは死と再生を詩う ‘I did not die.’ のヴァージョンの方の意味を濃厚に見ることができる箇所である。

このように、「千の風になって」の原詩との類似表現に限定して考えると、「千の風になって」とエミリの文学には共通して、魂は生き続けるのであれいったん死んでから自然の中に再生するのであれ、人間のいのちと魂の不滅性・継続性が表わされている点で、ひとまず、二つは中心で共通していると見ることができるようである。しかし、エミリが 148 番の詩で書いている「ひとたび生きた人間は決して死ぬことはない」という言葉は、実のところ、「千の風になって」の一つのヴァージョンに該当するという以上に、エミリ独自の存在論ないしは宇宙論に繋がる重大な意味があるのだといわざるを得ないのである。「千の風になって」が自然のサイクルの中で魂の生き続けることを優しく見ているのとは違い、エミリは意思的に宇宙の神性と合一する永遠不滅のいのちと魂の実在を見ようとする、主体としての人間の生・死を

考えていることが明らかであるからだ。以下で検証するように、詩と『嵐が丘』の細部の言説は、そのことを明示している。

II エミリ・ブロンテの詩に見られる《宇宙の力と生の原理》について

エミリ・ブロンテの多くの詩が提示するのは、キリスト教の制度的神の力を超越して、しかし神的な力として偏在する〈宇宙の力〉と、その力とともに生きている人間の〈生の原理〉である。それが特に明瞭で分かりやすい詩は、44番、147番、148番、149番、174番、181番、183番、188番、191番、「番外」の10篇だと思う。それらは、大地や自然や宇宙に深く行き渡っている神的なものの力の中に人間の生命の源泉を見、そのような宇宙に漲る神的な力の中に人間の魂を解放して真に自由な存在となり、人間が宇宙の力すなわち神的なものの力を内在化して不滅の存在となることを、〈生の原理〉として提示するものである。

まず、エミリの文学全体に通底するものとして看過できない191番の詩で、エミリの宇宙観・存在論を確認しておきたい。

O God within my breast
Almighty ever-present Deity
Life, that in me hast rest
As I Undying Life, have power in Thee

Though Earth and moon were gone
And suns and universes ceased to be
And thou wert left alone
Every Existence would exist in thee

There is not room for Death

Nor atom that his might could render void

Since thou art Being and Breath

And what thou art may never be destroyed. (No. 191, sts. 2, 6, 7)

おお わたしの胸のうちの神

全能の とこしえにおわします神

〈不死のいのち〉であるわたしがあなたのうちでその力を得るとき

〈いのち〉であるあなたはわたしのうちで安らぎ給う

大地と月が消えてなくなり

また太陽と宇宙がなくなってしまうも

あなただけが残っていれば

〈あらゆる存在〉はあなたのなかに存在するだろう

そこには死の入る余地はなく

死の力が無と成し得る原子もない

あなたは〈実在〉であり〈息吹〉であるので

あなたそのものが破壊されることは決してないからだ。(191 番 第 2・6・7 連)

エミリは、第 2 連や第 7 連にあるように、〈宇宙の神性〉と〈わたし〉がそれぞれに〈不滅の実体〉であるようなつながりを共生することをこそ、人間に魂の永遠的解放をもたらすものであり、相互に不滅性を分かち合うものと示している。人間が大地の息吹と合一して永遠のいのちを生きるとする「千の風になって」のような視点は、エミリにあっては、第一に、このように死自体が明瞭に否定され、人間はそもそも不死のいのちをもつ存在だとする考えから生成されているのである。そして第二には、宇宙に偏在し人間の

いのちのうちにある神的なものを人が主体存在として内在化して初めて、人は大地の息吹である神性としての永遠のいのちを得るのだと、この詩は言っている。これが、「千の風になって」にはない、エミリ独自の見方である。

これは、先に見た 148 番の詩では、〈宇宙の力〉と〈生の原理〉として表わされており、次のように、同じようにいのちの永遠化とつないで考えられているものである。

Yes, I could swear that glorious wind
Has swept the world aside,
Has dashed its memory from thy mind
Like foam-bells from the tide—

And thou art now a spirit pouring
Thy presence into all—
The essence of the Tempest's roaring
And of the Tempest's fall—

A universal influence
From Thine own influence free;
A principle of life, intense,
Lost to mortality.

(No. 148, sts. 3, 4, 5)

そうだ あの神々しい風が俗世界を
吹き払ったのだとわたしには断言できる
海潮から泡沫を消し去るように
おまえの心から俗世界の記憶を抹消したのだと——

そうしておまえは今こそあらゆるものに
おまえの存在を注ぎ込む魂そのものとなるのだ——
嵐の怒号の精髓となり
また嵐の襲来の精髓となるのだ——

おまえはおまえ自身の力から解き放たれた
宇宙の力
人間には失われた
強烈な生の原理なのだ。

(148 番 第 3・4・5 連)

この詩においてエミリは、わたしたち人間は宇宙に満ちる神的な力によって魂の力を獲得するとき、不滅の生を生きるのであると言っている。人間の魂と存在は、宇宙の力と合一して永遠性を意味づけられるのだと示している。そしてそれを、「生の原理」と見ているのである。

このような書き方が、同じように 149 番、152 番の詩でもなされている。まず 149 番から見ると、先に引用したところとは別の連では、次のように永遠存在の意味が表現されている。

Let me remember half the woe
I've seen and heard and felt below,
And Heaven itself, so pure and blest,
Could never give my spirit rest.
.....

She turns from Heaven a careless eye
And only mourns that we must die!

(No, 149)

わたしたちがこの世でこれまで見 聞き 感じた

苦しみを半分でも思い出すといい

いとも清らかで祝福された〈天〉そのものといえども

わたしの魂に安らぎを与えることができないことはたしかだ。

.....

大地は〈天〉から無頓着に目をそらせて

ただわたしたち人間が死ぬ運命であることを嘆くだけだ！ (149 番)

死と不滅性を詩うエミリの詩のディスコースには、このように〈天〉として表わされている神の存在が介入されているが、それは《死——天の神性——大地の不滅性》という一連のつながりの中で、大地の不滅性に神的イメージを与えるレトリックになっていると分かるのである。エミリは、死すべき人間が〈宇宙の神的な力〉と合一し〈生の原理〉を生きる時、人間は死と生とにかかわらず、この大地の息吹の中に解放されて永遠存在となるのだと、それがいのちをもったということだと、表わしているのである。

そして 152 番では、死者の魂と永遠存在を述べる先に見た言葉の続きは、同様に神的なイメージとつながれて表現されているのである。

And from that world of heavenly light

Will she not always bend,

To guide us in our lifetime's night

And guard us to the end?

(No. 152, st. 5)

そして神々しい光に満ちたあの世界から

母さまはいつも身をかがめて

この暗黒の生を生きる僕たちを導き

最後まで僕たちを守ってくださるのではないだろうか？ (152 番 第 5 連)

ここでも、死と永遠のいのちが、大地の神性との合一あるいは宇宙の神的な力への魂の解放として意味づけられるディスコースが使われている。エミリは神的なものを宇宙の力の中に置き、魂をそこに一体化させて不滅の存在とすることを〈生の原理〉として表わしていることが、ここには明らかである。

同じ視点は、「番外」(“Stanzas”)にもさらに明瞭である。エミリは次のように書いているからである。

What have those lonely mountains worth revealing?

More glory and more grief than I can tell:

The earth that wakes one human heart to feeling

Can centre both the worlds of Heaven and Hell. (“Stanzas”, st. 5)

あの淋しい山々には啓示に値するどのようなものがあるのだろうか？

わたしには言うことができないほどの大きな栄光と大きな悲しみがあるのだ。

一人の人間の心を感動させる大地は

〈天国〉と〈地獄〉を二つながら中心におくことができるのだ。

(「番外」第5連)

この大地の上に、この宇宙の中に、すべてがあるとエミリは考えている。ハットフィールド (C. W. Hatfield) は「エミリはこの詩において、〈天国〉よりも〈大地〉に対する大いなる愛を示している」⁵⁾と云うが、エミリが求めるものは、この世界に行き渡る〈宇宙的力としての神性〉との合一であることを、この詩のディスコースは示しているのである。

以上のように、エミリの詩の特徴は、魂の自由を希求し、魂の解放を願い、この世で神性に包まれて不滅の存在であることを求め、それを〈宇宙の力〉と〈生の原理〉として示すことである、と分かるのである。このよう

に、生の永遠的継続を神的イメージと結んで表現し、〈宇宙の力〉すなわち〈宇宙に偏在する神性〉と意味づける点で、エミリの〈いのちの永遠化〉と、「千の風になって」の〈いのちの永遠化〉の詩的表現は異質であると言えるのである。

Ⅲ 『嵐が丘』に見られる《宇宙的理念》について

では、『嵐が丘』の場合はどうか。『嵐が丘』ではエミリ・ブロンテは、〈いのちの永遠化〉と〈生の原理〉について、さらに宗教的なディスコースを用い、〈宇宙的理念〉を表象する物語を書いているのである。『嵐が丘』では基本的な物語のシーケンスは、伝統的なキリスト教の側にいる人間と、それを逸脱する人間の、宗教的二項対立でもって構築されているが、この基本構造においてエミリは、天国と地獄の概念を現世的宇宙的時空間に入れて魂の解放といのちの永遠存在を表わすことを意図しているようである。《人間は、この地上において魂の中心で神的なものと同し不滅のいのちのヴィジョンを持つこと》——これが、『嵐が丘』でエミリが描こうとしているもののように思われる。

まず、『嵐が丘』の宗教的二項対立のシーケンスと構造から説明する。『嵐が丘』では、登場人物はすべてキリスト教に対してどのような立場にあるのかを明瞭にするディスコースによって書かれ、物語が構造化されている。第一に、ヒースクリフとキャサリンのメイン・ストーリーを進めるシーケンスの担い手が、典型的キリスト教徒である堅実で信仰心に富んだネリーに設定されていることがある。そしてその上に、ネリーというキリスト教徒の信仰深さを視点にして、脱キリスト教的人物ヒースクリフとキャサリンを対置し、その違いを明瞭にする方法が採用されていることが挙げられる。その一例としては、次のようである。キャサリンの死に対して苦悶するヒースクリフについて、ネリーは「神様に向かって挑みかかっても、結局負けて恥ずかしい思いをするのがオチですよ」(‘... your pride cannot blind

God! You tempt him to wring them, till he forces a cry of humiliation!', Ch. 16) と述べ、神に反逆するヒースクリフ像を作り上げていること。また、キャサリンの魂との合一に心を奪われているヒースクリフについても、彼は「昨夜、俺は地獄の入り口にいた。だが今日は、天国が見えるところにいるんだ」(‘Last night, I was on the threshold of hell. To-day, I am within sight of my heaven. . .’, Ch. 34) と言ったと、この世に天国と地獄を見る反キリスト教的な姿として描出していること。しかもさらに畳み掛けるように、ネリーは自分の感想を「そのような彼が、まさにこの世の人間でない悪鬼に見えた」(‘It appeared to me, Not Mr Heathcliff, but a goblin. . .’, Ch. 34) と言って、反キリスト教的ヒースクリフの人間像を構築させているのである。

また、『嵐が丘』におけるもう一人のシークエンスの担い手ロックウッド (Lockwood) も、善良なるキリスト教徒そのものとして設定されており、ヒースクリフをめぐる物語の反キリスト教的な相を強調する役割を与えられている。たとえば、ロックウッドが「嵐が丘」に泊まって見た夢、ギデマン・スー礼拝堂 (The Chapel of Gimmerden Sough) でのドタバタ劇と、キャサリンの幽霊の夢が、それである。ロックウッドのこの一連の語りによって、神の許されざる罪人となるキャサリンとヒースクリフの反キリスト教的生が暗示され、それに対峙している善きキリスト教徒ロックウッドの図が意図されていることが、ここには明らかである。さらに、この導入部におけるロックウッドの宗教的逸脱に対する不安感は、最終部分の宗教的秩序化に対する安心感と対応されていることも確かである。ロックウッドは結婚を控えたキャシー (Cathy) とヘアトン (Heaton) を見て、「二人一緒なら、サタンとその軍勢に対してもものともしないでしょうね」(‘Together they would brave satan and all his legions.’, Ch. 34) と言ったと、キリスト教的ディスコースで語り、彼らの側の安泰を暗示して、反キリスト教的キャサリンとヒースクリフによって引き起こされた生の逸脱ぶりを強調しているか

らである。

キャサリンの「天国からの追放の夢」について語るネリーのディスコースもまた、キャサリンの反キリスト教的な生の意味を際立たせるものである。ネリーはキャサリンが、「ただ天国はわたしの住むところではなさそうだと聞いたかっただけなの。……別の夢と同じように、わたしの秘密を説明するのに、ちょうど役立つでしょうからね」(‘I was only going to say that heaven did not seem to be my home. . . . That will do to explain my secret, as well as the other. . . .’, Ch. 9) と言ったと語る。ネリーはこの直前で、キャサロンが何か夢の話をしようとしたことについて、「嫌な前兆と恐ろしい破局の予感を感じ取って押しとどめた」のだと言うのであるから、ミリアム・アロット (Miriam Allott) が指摘するように、ここでキャサリンが ‘the other’ と言っているのは ‘the other dream’ で、実はキャサリンはもう一つ別の夢の話をするつもりだったのである。⁶そしてその夢とは、「宇宙の無法性のようなもの」⁷、すなわち「地獄脱出の夢」⁸、であったにちがいない。ネリーはそれを予知して、話すのを阻止したとなっている。エミリはネリーに、キャサリンが天国から追放される夢を見たこと、また地獄から脱出する夢を見ただろうことを暗示させることによって、キャサリンの生き方もまた彼岸の天国も地獄も否定する、反キリスト教的なものであると示しているのである。そしてネリーのこの語りによって、エミリは、キャサリンとヒースクリフの魂の合一が、死後世界と彼岸を前提とするキリスト教的世界観・宇宙観とはかけ離れていることを明確にしているのである。

また、その一方でエミリは、ネリーには他の人物たちを典型的キリスト教徒として語らせ、キャサリンとヒースクリフの反キリスト教的な相を際立たせる語り方をさせているのである。たとえばネリーは、イザベラ (Isabella) やキャシーらはヒースクリフを ‘Satan, devil, demon, fiend, goblin, monster, evil, diabolical’ といった語で繰り返し表現したと言う。エミリはそのようにして、〈神に盾突くサタン〉のイメージでヒースクリフ像を創り

上げる工夫をしているようである。

以上のようにして、『嵐が丘』におけるディスコースは、宗教的二項対立によって、キャサリンとヒースクリフの宗教的特殊性の意味を明らかにする基礎を準備しているように見えるのであるが、それは、エミリがそのような仕掛けを用いて、〈人間の永遠存在〉のテーマをさらに進めて〈宇宙的理念〉につないで表現しようとしているからであるように思われるのだ。『嵐が丘』でエミリがもっとも力を入れて表わそうとしているのは、ヒースクリフに語らせている次の言葉の中の〈宇宙的理念〉に集約されていると見えるからである。

‘... it is by compulsion, that I do the slightest act, not prompted by one thought, and by compulsion, that I notice anything alive or dead, which is not associated with one universal idea ... I have a single wish, and my whole being and faculties are yearning to attain it. (Wuthering Heights, Ch. 33)

「……ひとつの思いに駆り立てられなければ、わずかな行為をするにも無理やりにしなければならぬし、また、あるひとつの宇宙的理念に関わっていないものには、生きているものでも死んだものでも、無理やりに注意を向けなければ気付かない始末だ……俺の願いはただひとつで、俺の全身全霊がそれをかなえようと求めている」

(『嵐が丘』第 33 章)

このようにヒースクリフの言う「ひとつの思い」や「ひとつの願い」とは、キャサリンの魂との合一のことであろう。ヒースクリフの魂はキャサリンの魂だけを求めてきて、まもなく合一するのだと言う。そしてそれは、「ひとつの宇宙的理念に関わって」いるからこそ可能であるというのである。すなわち、生きていても死んでいても、宇宙の根源を成しているひとつのアイデアすなわち神性につながっていくこと、それを、ヒースクリフの魂はキャサリ

ンの魂とのつながりを通して成就するのだと、この言葉は表わしている。

この直前にヒースクリフが言う言葉とも、このことは関わっている。先の第1章で既に引用(Ch. 33)したことであるが、宇宙に偏在するあらゆるものにキャサリンのいのちを見るヒースクリフは、キャサリンの魂にリンクすることで、宇宙のいのちと共生していると言っている。つまりエミリは、これらの言説をヒースクリフに使わせることによって、〈魂〉と〈魂〉がつながり、〈人〉と〈アイデアとしての神性〉と〈宇宙のエッセンス〉がつながって、〈広々とした宇宙に永遠不滅の存在となるいのち〉を表象することを、夢想していると思われる。宇宙にはそのようなことを可能にする根本的法則(すなわちひとつの原理)が存在することを、エミリは〈宇宙的理念〉と表現している。人間はそこにつながって初めて、全存在が全うされるのである。エミリの考える永遠のいのちとは、そのような神性としての宇宙的理念自体であると、わたしたちには確認できるのである。

そのように考え得る手がかりは、反キリスト教的であるとされているヒースクリフとキャサリンのディスコースの、'God, soul, mind, heart, spirit, ghost'などの語の使われ方にある。たとえばヒースクリフは、死の直前と死の直後のキャサリンに向けて、次のように言ったとされている。

'... nothing that God or satan could inflict would have parted us, *you*, of your own will, did it. I have not broken your heart—*you* have broken it—and in breaking it, you have broken mine. ... oh, God would *you* like to live with your soul in the grave?'
(*Wuthering Heights*, Ch. 15)

「……神やサタンの力によってさえ俺たちのあいだを引き離せなかったのに、おまえが、おまえ自らの意志で引き離してしまったのだ。俺がおまえの心を打ち砕いたのではない——おまえが自分で打ち砕いたのだ。……おお、神様！ あなたは自らの魂を墓に埋めたままで生きていたいでしょうか？」

(『嵐が丘』第 15 章)

'... haunt me then! ... I know that ghosts *have* wandered on earth. ... only *do* not leave me in this abyss, where I cannot find you! Oh God! it is unutterable! I *cannot* live without my life! I *cannot* live without my soul!

(*Wuthering Heights*, Ch. 16)

「……それでは俺のところに出て来い！ ……幽霊がこの世をさまよったことを、俺は知っている。……おまえの姿が見えないこの奈落に、俺ひとりを残していかなくてくれ！ おお、神様！ そんなことは言いようもない苦しみです！俺のいのちなしに俺は生きられない！ 俺の魂なしには俺は生きることができない！」

(『嵐が丘』第 16 章)

どちらのディスコースも 'heart' や 'soul' を使って、ヒースクリフの存在が唯一問題にするのは、キャサリンとのあいだの心や魂のつながりのことであると示している。そして、心や魂がつながっているので、キャサリンを失うことは自らの魂を失い、いのちを失うことだと言わせているのである。エミリが 'life' を 'soul' と言い換えて表わすのは、魂でありいのち自体であるような人間のつながりこそが、生のすべてであるということを示しているためであるだろう。そして興味深いのは、いずれの場合もエミリがヒースクリフに、キャサリンとの魂のつながりを思うとき神への呼びかけをさせていることである。先に見てきたように、反キリスト教的な相をさまざまに強調しているヒースクリフに、なぜ神への呼びかけをさせているのか。それは、魂が結びつくとは宇宙に偏在する宇宙的力としての神性につながっていくことだと、ヒースクリフに考えさせているからではないか。しかも先に見た第 33 章でも、エミリはキャサリンの魂との合一を思うときのヒースクリフに、'O, God!' と呼びかけさせている。エミリがそのようなディスコースで表わ

そうとしているのは、人間が魂そのもので求めるとき宇宙のエッセンスと神的なものは深くつながっていくということ、そしてそのとき存在は神力的に抱き取られて不滅の自由を獲得し、宇宙の魂に合一するのだということであるにちがいない。すなわちそれが、エミリの考える人間の〈永遠存在〉であり、〈宇宙的理念〉であると思うのである。

同じことは、キャサリンのディスコースにおいても表わされている。ネリーにヒースクリフとの一心同体を述べるところの次のようなキャサリンの言葉は、魂においてつながりがあるヒースクリフを自分そのものだと表現しているからである。

‘... If all else perished, and *he* remained, I should still continue to be; and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it. ... I *am* Heathcliff—he’s always, always in my mind... as my own being...’

(*Wuthering Heights*, Ch. 33)

「もし他のものがみんな消滅してしまっても、彼が残っていれば、わたしはずっと存在し続けるのよ。そしてもし他のものがみんな残っていても、彼が消えてなくなれば、この宇宙はまったく未知のものとなって、もはやわたしがその一部だとは思えなくなってしまうのだから。……わたしはヒースクリフなの——彼はわたし自身の存在として、いつだってわたしの心の中にいるのよ……」

(『嵐が丘』第33章)

「ヒースクリフがいなくなれば、自分もまたこの宇宙の一部だとは思えなくなる」というレトリックには、前述した191番の詩との類似が明らかのように、‘*he*’は‘*God*’に置き換え可能なものである。宇宙に偏在する神的な力と人間の魂と宇宙の根源的力がつながりあうとき、それらは同質の〈永遠の

いのち〉というエッセンスとなってこの宇宙を充たすのだと、エミリはキャサリンに言わせているのである。キャサリンもヒースクリフと同様に、自分自身を、「自分以上の自分のいのち」をもって宇宙につながって解放されている存在だと考えていると、エミリは表わしているのである。

そのような魂と魂の結びつきの可能性は、ヒースクリフがキャサリンの‘spirit’を感じたという言葉によっても、次のように明示されている。

‘... eternally, from dawn to dawn, praying her to return to me—her spirit—I have a strong faith in ghosts. . . I knew no living thing in flesh and blood was by—but as certainly as you perceive the approach to some substantial body in the dark, though it cannot be discerned, so certainly I felt that Cathy was there, not under me, but on the earth.’

(*Wuthering Heights*, Ch. 29)

「俺はずっと、朝から晩まで、彼女に——彼女の魂に、俺のところに戻ってきてくれと祈っていた。……血と肉をもった生きものがそばにいないことは分かっているのだが——その姿が見分けられなくても闇の中で生きた人間の近づくのがたしかに分かるように、俺もまたキャシーがそこに、俺の足の下ではなくこの地上に、いるのを感じたんだ」

(『嵐が丘』第 29 章)

‘spirit’の語は、先に見た詩では、エミリが神的なものや大地のいのちや宇宙のエッセンスを表象するのに使用したものであったが、ここでも魂そのものとして、キャサリンの存在のエッセンスとして、使われている。宇宙に遍く存在するいのちの表象とされているのである。

だが、そうしてキャサリンの魂の存在を実感させているにもかかわらず、それはヒースクリフに、「明らかに歓喜と苦痛の両方を極度にもたらす」(‘it communicated, apparently, both pleasure and pain, in exquisite

extremes. . . ; Ch. 34) ものであるとされているのである。エミリはそれによって、〈宇宙的理念〉の意味を明確にしているのであろう。この「歓喜と苦痛」は、先に述べたように「天国」と「地獄」に呼応しているもので、エミリはこの地上で神的・宇宙的・不滅的なものにリンクする魂は、天国と地獄を二つながらに経験するのだと考えているようである。セシル (David Cecil) が「エミリ・ブロンテの人生観では、善悪を容易に対照させることはしない。生のある面を善と言いつつある面を悪と言うことは、ある経験は受け入れるが別の経験は拒否するということである。そうではなくて、すべての経験を受け入れるのが、エミリ・ブロンテの姿勢を貫く本質的特徴なのである⁹⁾と指摘しているように、エミリは『嵐が丘』において、人間と神と宇宙に関わるすべての経験を受け入れ肯定する思想を提示しているようである。キリスト教的な天国と地獄の二項対立概念を、この大地の宇宙的空間において存立させ、人間の魂と宇宙の力と神性がひとつにリンクするいのちの在りようを〈宇宙的理念〉として表しているのである。それは、ミラー (Hillis Miller) が言うように、ネリーの「合理的に整理された、伝統的に宗教的な説明である」¹⁰⁾ 語り方が導くような、伝統的キリスト教の神の概念を見直させるものであろう。すべてがこの大地の上で神性とともにあるいのちの在りようの、来し方と行く末を見つめているのが、エミリ・ブロンテの文学であろうと思うのである。

IV 魂と主体の表象について

エミリの文学は、「千の風になって」と類似した表現を用いて、同じ〈魂の不滅性・いのちの永遠性〉のテーマを扱っているにもかかわらず、以上のように神性につながるディスコースを持ち込んで、異質なものを生成しているのである。わたくしはこれには、エミリが人間を主体存在として捉えていることが大きく関係していると考えている。エミリの文学では、〈主体である人間が永遠のいのちをもつ存在であるとはどういうことか〉が、問題にさ

れていると思うからである。最後に、そのことを簡単に説明したい。

十七世紀デカルト以降の近代思想においては、近代的自我をもった人間は、自己同一的主体存在であると認識されてきた。しかし十九世紀に入ると、人間の存在は「人間とは誰か」とつねに問いかけを発する不安定な実存的主体である、と認識されるようになった。たとえばフーコー (Michel Foucault) は、主体というのは普遍的な規範の形式としてあるのではなく (つまり、内側にある自己の規範に従って生きている、揺るぎない自己同一的人間として存在するのではなくて)、能力ある人々がつねに自己を鍛え、ある高みを求めて行う〈生の様式〉であると考えている。そしてフーコーはその〈生の様式〉を、「知と真理との関係」、「権力との関係」、「道徳との関係」という三つのプロセスで説明し、これらのプロセスを経て、近代的人間は自己の規範に従属する近代的主体になるのだと説明している。¹¹

そして、とくに晩年のフーコーは、「道徳との関係」の主体化のプロセスに、〈プラトンの主体〉と〈セネカの主体〉の、「自己に専念する」二つの生存形式をもつ主体を見て、それを重視した。フーコーによると、「プラトンは魂に対して、自分自身を振り返ることによって、その本性を見出すように命じた」のであるが、それは、魂が自己を振り返ることによって「視線が『高み』に引き寄せられるような運動」をすることになる、すなわち、魂は「神的な要素や本質、そして本質がそこで可視的なものになる場である天上界などに引き寄せられる」ことになるからだ、と言うのである。つまり、プラトンの主体は、「主体の中の真理を発見する」、あるいは「魂がその根源的な本性と誕生の地を再発見する」主体なのであると、フーコーは考えているのである。それに対して、セネカが示唆しているのは、魂が「教育や読書や忠告が与える真理を吸収する」ことであると言い、魂は「真理が自分自身の一部となるまで、そして内的で恒常的かつねに活動しているような、行為の内的な原則になるまで、それを同化する」のであると考えている。すなわち、セネカの主体は、魂が知識を吸収することによって、「主体が知らな

かった真理、主体の内にはなかった真理を主体に備えさせる」主体なのであると、フーコーは説明しているのである。¹²

このようなフーコーの主体の解釈は、まさしく、ブロンテ三人姉妹が置かれていた時代の要求する倫理的主体のあり方を捉えていて、ブロンテたちのテキストにも明らかにその反映を見ることができる。たとえば、先にアン（Anne Brontë, 1820-49）とシャーロット（Charlotte Brontë, 1816-55）から説明すると、アンは「真理を語ることのできる主体としての自らを試し、試練にかけている」ことを意識する主体、「真理を繰り返し見ようとし主体化を進めていることを語る」セネカ的主体を設定しているし、シャーロットも「知と権力が内側から自己規定してくる近代的主体性を生きる」主体、「自己をつねに厳しく統御し鍛錬して高みを目指す」セネカ的主体を設定していると言える。しかしアンやシャーロットとは違い、エミリの場合は、詩の語り手や小説の主人公らを、「主体のなかの真理を発見する」主体、「魂が神的な要素や本質の高みに引き寄せられる」プラトンの主体として、テキスト内で表象していることが明らかなのである。

エミリの文学もまた、フーコーが考えるように、人々が時代や人間存在や主体性に対してもっていた思想を忠実に反映しているのである。エミリの文学は、先に見てきたような独自の宇宙観のなかに、〈時代が思想としていた非自己同一的主体・近代的主体である人間が生きてはどのような意味をもつか〉ということを考察し、それをテーマにして表現していると思うのである。

たとえば、もう一度代表的な 191 番の詩に戻って説明すると、あらゆるものをこえて存在するいのちの永遠性・不滅性は、現世をこえた世界にあるというよりも、現世のこの大地の上に、この宇宙のなかに、語り手である主体〈わたし〉の力でもって現在=実在させられようとしているもの、というふうに読めるのではないか。グナッシア（Jill Dix Ghnassia）の言うように、「エミリの内部の神があらゆる存在を含んでいるのは、〈あらゆる存在はあ

なたのなかに存在する〉から」¹³であるが、それは、主体としての〈わたし〉の意志が、あらゆるものに神性としてのいのちを見ようとして存在させているものである。語り手〈わたし〉は、〈不滅〉であり〈息吹〉である神的なものを、〈主体であるわたしのなかの真理として再発見し〉、〈魂を神的な要素や本質の高みに引き寄せる〉主体化のプロセスを経験しているのである。《〈不滅〉であり〈息吹〉であるものがこの世界の現世の実在であれば、そのなかに実在するあらゆるものもまたこの世界に不滅のものとして実在する》——語り手〈わたし〉のこのようなレトリックは、「わたしがそれを考えるのでなければ、今や何ものも存在しない」¹⁴という主体の主観を前面に出して、すべてのものの現世への実在化を可能とするものである。エミリの文学に表象され偏在させられている〈永遠のいのち〉は、まさしく魂が神的な高みを目指して主体化し続ける〈プラトンの主体〉が生成することのできるものである。それが、エミリの表わす〈千の風〉としての〈魂の永遠性〉ということであろうと、わたしは思っている。

おわりに

「千の風になって」を介して、エミリー・ブロンテの文学における〈千の風〉、すなわち〈宇宙の永遠のいのち〉と〈魂〉のことを考察してきたが、以上のことから分かるのは、まず、これら二つには人間を不滅の存在と捉える点で共通のテーマがあるということである。「千の風になって」が流行り人々を慰めているという現象には、よく言われるように、現代の合理的繁栄と荒廃がヴィクトリア朝のそれと似ているということと関係があるのかもしれない。不安定な激動の時代にあって、人間は、永遠不滅のいのちと存在様式を考えることで、根本的な存在原理を築いてその支えとしていることが見えてくる。「千の風になって」の方に神性や主体存在という視点が明瞭でなく、エミリの文学にそれらが明らかであるのは、エミリがヴィクトリア朝のキリスト教の影響を多大に受けていたことと深く関わっている。オール

ティック (Richard D. Altick) が言うように、エミリオ、「キリスト教の教えによって厳しく制限された文化の中で育ち、……宗教が人生観のすべてを決定し、人生の本質と目的に対する評価を決定していた」¹⁵ 時代を生きていたのであるから。そのような宗教的縛りと主体的人間存在の思想の行き渡るなかで、エミリオまた現代のわたしたち同様に、合理的繁栄とは無縁の魂の問題を考えて、希望としていったのであろう。¹⁶ 激動の時代を乗り越えるとき、〈宇宙につながる永遠のいのち〉を存在の根本的理念にすることの意味を、これら二つは教えている。

だが一方で、厳密に見ていくと、エミリオの〈千の風〉と「千の風になって」のなかの〈千の風〉とは、その厳しさにおいて、あまりにも違うことに愕然とする。作者不詳といわれる「千の風になって」が表象するところの、優しい千の風になって魂をゆらゆら遊ばせている〈生きているわたし・死んでいるわたし〉の實在は、確かに、わたしたちに死を超越する確かな存在様式を提示しているのである。けれども、エミリオの〈千の風〉は、「神々しい風」(glorious wind) として吹き渡り、あるいは「嵐の怒号の精髓」(the essence of Tempest's roaring) として吹き荒れているのである (No. 148)。のんびりと魂ゆらゆら遊ぶどころではない。エミリオが表わすように、わたしたちは主体存在として魂の高みや大地の息吹の神性に近づけるよう、自らを絶えず〈死んでいても生きていても〉鍛えていかなければならないという、宇宙的理念を生きるのであるということ。そのようなエミリオの存在論を、「千の風になって」を通してわたしたちは確認することができるのである。

(本稿は、日本ブロンテ協会関西支部 2008 年春季大会 (於近畿大学) での講演を基に、加筆修正したものである。)

注

- 1 本稿で言及する詩番号はすべて、C. W. Hatfield (ed.), *The Complete Poems of Emily Jane Brontë* (New York: Columbia University Press, 1995) による。

- 2 新井満『千の風になって』（講談社，2003），pp. 48-49.
- 3 同書，pp. 49-50.
- 4 本稿における『嵐が丘』からの引用はすべて，Emily Brontë, *Wuthering Heights*, edited by David Daiches (Harmondsworth: Penguin Books, 1987) による。
- 5 Hatfield, p. 12.
- 6 Miriam Allott (ed.), *Emily Brontë: Wuthering Heights* (London: Macmillan, 1970), pp. 194-95.
- 7 Ibid., p. 195.
- 8 笹尾純正『「沈黙」の彼方へ』（C. S. R. srl-Roma, 2002），p. 70.
- 9 David Cecil, *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation* (New York: Bobbs-Merril, 1935), p. 154.
- 10 Hillis J. Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels* (Cambridge: Harvard University Press, 1982), p. 45.
- 11 ミシェル・フーコー『ミシェル・フーコー思考集成X 1984-88 倫理／道徳／啓蒙』
運實重彦ほか監修（筑摩書房，2002），pp. 307-72.
内田隆三『ミシェル・フーコー』（講談社現代新書，1990），pp. 190-207.
- 12 ミシェル・フーコー『主体の解釈学-コレージュ・ド・フランス講義 1981-1982
年度』廣瀬浩司／原和之訳（筑摩書房，2004），pp. 555-62.
———『真理とディスクール-パレーシア講義』中山元訳（筑摩書房，
2002），pp. 212-22.
- 13 Jill Dix Ghnassia, *Metaphysical Rebellion in the Works of Emily Bronte: A Reinterpretation* (New York: St. Martin's Press, 1994), p. 200.
Cf. ジル・ディックス・グナッシア『エミリー・ブロンテ——神への反逆』中岡
洋／芦澤久江共訳（彩流社，2003）
- 14 Hillis Miller, *The Disappearance of God: Fi-ve Nineteen-Century Writers*
(Cambridge: Harvard University Press, 1957), pp. 181-82.
- 15 Richard D. Altick, *Victorian People and Ideas: A Companion for the Modern*

Readers of Victorian Literature (New York: W. W. Norton & Company, 1973), p. 203.

- 16 Marianne Thormählen, *The Brontës and Religion* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994), p. 47.